

第21回

函館港イルミネーション映画祭
第19回シナリオ大賞

審査員奨励賞

函館黄金 遁走曲

上原 正志

2015





【作者プロフィール】

うえはらまさし

東京都港区出身。シナリオ・センター講師。

「オリーブの島脚本賞2014」に於いて「少年水練王」で準グランプリを受賞。

【あらすじ】

大正5年（1916年）、北海道はモダン都市・函館。夏。男子中学生4人が、そぞろ歩く。2年の阿部正雄は、ベレー帽とマンドリンを愛す不良。年長の4年・長谷川海太郎が、素行をたしなめるも気にしない。海太郎が、日本の女の子に付きまとうロシア水兵たちを注意し、怒った彼らにナイフを向けられる。そのピンチを救ったのは、中学の使丁（してい…用務員）の内藤。片目片腕の老人だが、杖で水兵たちを撃退。▼「土方歳三は生きている」という噂が広まる。新聞社も取り上げ、発見者に賞金貳萬円（現在の5500万円）を出すと。正雄たちは、土方を研究、目撃情報と

収集。土方、生きていれば81歳。正雄たちは、怪しい人物に1人ずつ対面。▼片腕片足の浮浪者は、即「オレは土方歳三」と告白。正雄たちを驚かす。土方の一生を要領よく語る。特に可愛がっていた市村鉄之助に遺品を渡す場面は感動的。正雄たちは出来過ぎと疑う。その後も老婆の役者が「私が土方」と言ったり、老剣道場主に、4人はコテンパンに叩かれたり、養老院のボケ老人であったり…。ついにはアメリカ教会の牧師に会い、聖書1ページを暗唱できたら教えるといわれ、海太郎が完璧にやり遂げる。▼この騒動の中心人物を突き止める。船会社長の義豊も、土方と鉄之助の別れを熱く語る。正雄は、義豊が鉄之助本人と見抜く。鉄之助は、土方を愛するゆえに今回の

騒動を起こしたと話す。▼これで一件落着
か。賞金は出ない。正雄たちは、使丁の内
藤を訪ね、鉄之助邸に連れて行く。鉄之助に、
もう一度、土方との別れを語らせる。鉄之
助が、語る途中で、内藤は「大事なモノが
抜けている」。内藤は、土方が、愛刀・和
泉守兼定を鉄之助に託したことを語る。し
かし土方の義兄に愛刀は届けられず、今日
までの47年間、鉄之助の手元に。鉄之助が
土方の「遺品」をネコババしたのだ。内藤
こそ、土方歳三のなれの果てだった。▼そ
の後、少年たちは欧米留学して作家になった。

【登場人物】

阿部正雄（13）

北海道庁立函館中学校
2年

長谷川海太郎（15）同・4年

長谷川潁二郎（12）海太郎の弟 同・1年

納谷三千男（12）同・1年

内藤隼人（81）函館中学校の使丁

（してい..用務員）

義豊 鉄（62）副鉄汽船社長

長谷川淑夫（45）海太郎・潁二郎の父

函館新聞社社長兼主筆

○函館・繁華街

洋風建築と古い建物が立ち並ぶ。

劇場、飲食店など、さまざまな店舗。

老若男女で、にぎわう。夏の服装。

太陽は照りつけるが、しのぎやすい。

通りの中央を路面電車が走る。

T―「大正5年（1916）夏 北

海道・函館」

ベレー帽をかぶり、マンドリンを持

った阿部正雄（13）、メガネをかけた

長谷川海太郎（15）、長谷川湊二郎

（12）、納谷三千男（12）が、そぞろ歩き。

○果物屋・店先

モダンな店舗。

正雄、積んであるレモンの山から1

個、手に取り、匂いを嗅ぎ、かじる。

微笑。

見ている、男の子。

正雄、別のレモン1個を取り、男の

子に差し出す。

男の子「…」

正雄、「やってみろ」と男の子に、す

める。

男の子、レモンを受け取り、見て、

ためらうもレモンをかじり、顔をし

かめる。

正雄、につこり笑って、

正雄「この体験は、君の財産になるだろう」

と去る。

果物屋の主人「あ、お代^{だい}」

正雄「その子の親にもらって、2個分」

海太郎、正雄の行動を見ていたが、

英国の水兵たちを見つけ、達者な英

語で、快活に話しかける。

海太郎「(英語) 素晴らしき我らが函館の街に、ようこそ!」

水兵の1人「(英語) 函館の自慢を教えてください」

海太郎「(英語で、とうとうと語る) よくぞ、聞いてくださった。函館の自慢は日本初が多いことだ。洋式築城、洋式帆船建造、測候所開設、商船学校開校、種痘の実施、牛乳・バターの製造、果てはコーヒー飲み初めから海水浴場開設までいたる。東京なんて、ここ函館に比べたら、ド田舎山奥だ! 猿の棲む里だ!」

と話しながらも正雄の行方が気にな

る。

○花屋・店先

正雄、来て、花を物色。

素朴な顔立ちの花屋の娘。

娘「いらつしやいませ」

正雄「君は、どんな花が好き?」

娘、戸惑うが、

娘「いいバラが入りました。美しいでしょう」

正雄「ああ、本当に美しい」

とバラを1輪、手に取る。

正雄、そのバラを娘の髪に挿す。

困惑した顔の娘。

正雄「ここに飾るのが、一番、ふさわしい」

正雄、ほほえむ。

娘、顔を赤らめる。

正雄、もう1輪、バラを取り、自分のベレー帽に挿し、マンドリンを奏^{かな}で、歌う。

正雄「(歌う) 恋はやさし 野辺の花よ 夏の日ざしにも あせぬ花よ…」

正雄、娘に投げキッスをして去る。

娘「…お代」

と言いかけるが、呆然、陶然と見送る。

海太郎、来た正雄に、

海太郎「正雄、いい加減にしろよ」

正雄「ご指導、ありがとうございます」

正雄、ケロッとした顔。

道に外国製のシャレた自転車が、停めてある。正雄、マンドリンを三千

男に預け、自転車を乗り回す。

あきれ顔で見ている海太郎。

4人の体の大きいロシア水兵たちが、日本の2人の女の子を執拗に誘っている。

女の子たちは、困惑と恐怖の様子。

海太郎「…」

水兵たち、女の子の手を引っ張って連れて行こうとする。女の子たち、抵抗。

周囲の日本人、見ているが、ロシア水兵を怖がり、助けようしない。

海太郎、ロシア水兵たちに近づき、

海太郎「(そこそこのロシア語) あきらめな

よ。脈なしだ」

ロシア水兵の1人「(ロシア語) あっちへ行け! 黄色い猿!」

ムツとする海太郎だが、ロシア水兵

たちに、にらまれて、それ以上、言えない。

日本の女の子、連れて行かれる。

突如、正雄の乗った自転車がロシア水兵に体当たり。

ロシア水兵、よろけ、内藤隼人(81)に、ぶつかる。ロシア水兵、カッとなって、内藤を突き飛ばす。

ロシア水兵「(ロシア語)邪魔だ、老いぼれ！」

ロシア水兵、大きなナイフを出し、自転車の正雄に向ける。

ロシア水兵、正雄を、にらみつけ、

ロシア水兵「(ロシア語)くそっ！ 小僧、

ただじゃ、おかねえからな！」

と向かっていく。

正雄、驚きと恐怖の顔。

あわてて自転車で逃げようとするがチェーンが外れてしまう。

海太郎も呆然。

人々の緊張。

その時、ロシア水兵のナイフが叩き落とされる。顔を歪める、ロシア水兵。内藤が立っている。右目右腕を失った身障者。左手に持った杖をロシア水兵に向けている。割と落ち着いた表情。

ほかの3人のロシア水兵、驚き、それぞれ、ナイフを取り出す。ナイフを内藤に叩き落された水兵、顔を歪める。痛打された手を、もう片方の無事な手で押さえ、落ちたナイフを拾う。

ロシア水兵、内藤を、にらみつけ、

ロシア水兵「（ロシア語）おもしれえ、ジジイ！ やるっていうんだな！ ちょうど、腕がムズムズしてた、ところだ！ 老いぼれで、その体でも、容赦しねえからな！ あの世界に、一足早く送ってやる！」

ナイフを内藤に向ける、4人のロシア水兵たち。

内藤、杖を水兵たちに向けたまま、

内藤「…」

呆然と見ている、正雄たち。

水兵たち、一斉に内藤に襲いかかる。

野次馬たちの悲鳴。

ハッとする正雄たち。

内藤、ロシア水兵たちのナイフの攻撃を杖で、はじき返し、彼らの体の

あらゆる場所を痛打していく。

内藤、彼らに杖の痛打だけでなく、手による当て身、足払い、さらには落ちている石を、すばやく拾って相手の顔面に投げつけることも。

呆然と見えている正雄たち。

ロシア水兵たち、うめき声をあげ、顔を歪め、痛打された体を押さえたり、足を引きずったりしながら逃げていく。恨み言を吐き捨てる。

野次馬たち「すごい！」「強い！」

と驚きと感心の様子。歓声と拍手も。

内藤、野次馬たちに囲まれる。

三千男、内藤を見て驚いた表情。

三千男「…あれ、内藤さんでしょ！、使丁^{しやてい}の」

正雄「…」

海太郎「人は見かけに、よらんな」

正雄たちも感心した様子。

隣に老人と若者が立っている。

若者「先生、あんな、ご老人も、いるのですね」

老人、内藤を見て、

老人「…あれは、天然理心流だな。…だが、流儀に忠実ではない。両手のあつた若い頃、刀のツカを握る時、左右の手の間隔を開^あけずに、ツバにぴたりつけていたな。短い握りの方が室内など狭い場所です。刀をあつかいやすい。しかも素早く振る下ろせる。実戦的な剣法。血の匂いにする。幾多の修羅場を潜り抜けてきたワザ。人を殺すことによって強くなった剣。…お前には、勧められんな」

正雄、老人の話を聞くともなく聞い

ている。

正雄「…」

○函館公園

和洋折衷型の広大な公園。

動物園。遊園地。図書館。博物館。

すりばち山。洋風石橋の白川橋…。

人々で、にぎわう。

芝生に座り込む、海太郎、正雄、

二郎、三千男。

海太郎と正雄はビール、ウイスキー、

濱二郎と三千男はサイダーを飲む。

三千男「でも内藤さん、ホントに、すごか

ったね」

海太郎「そんな感じの人に見えなかったけ

どな」

湊二郎「どこで修行したんだろう」

一同「…」

正雄「…いつから、使丁してるんだ？」

海太郎「さあ、もう、だいぶ、やっているんじゃないかな」

湊二郎「使丁の前は、何やっていたの？」

海太郎「先生方も知らないようだ。昔のことは、まったく話さないらしい」

正雄「…」

三千男「学校でも、いつも1人だよ、あの人家族も、いないし。話をした生徒っていないんじゃないかな」

一同「…」

湊二郎「あの体、どうしたんだろうね」

正雄「…」

一同、沈黙。

海太郎、そんな空気を払拭しようと、

海太郎「おい、正雄、なにか、おもしろい探偵小説の話をしろ」

正雄「ああ。…最近、あらためてシャーロック・ホームズ60編を読み返してみた」

三千男「（興味を示し）どうだった？」

正雄「シャーロックアンの研究テーマに『ホームズは女だった』というのがある」

三千男「へえ！」

海太郎、湊二郎も興味を示す。

正雄「それで俺は『相棒のワトソンこそ女だった』と思い至った」

三千男「へえ！」

海太郎、苦笑。

正雄「ワトソンのホームズに対する観察、心配、興味、詮索、愚痴、不満、いら立ち、

そして友情というより愛情、片思い。これらは女性的というより女性の感情、感覚そのもの」

三千男「…」

海太郎「さすが正雄、鋭いね」

正雄「いつそのこと宿敵モリアーティ教授も女だったとか。女同士の三角関係のドロドロ」

三千男「へえ！」

湊二郎「(あきれて)そこまで行くか」

正雄「漱石の『坊ちゃん』は読んだか？」

三千男「愉快だよね」

正雄「キヨという婆やが出てくるだろう、坊ちゃんを可愛がった」

三千男「ああ」

正雄「キヨの坊ちゃんへの溺愛、献身ぶり

は尋常ではない。そしてキヨという名は、漢字でサンズイに青↓『清』と書くのだが、これはキヨではなく、キヨシと読むべきだ。婆やのキヨは、実は老けた男色家キヨシだったのだ」

驚く、三千男。

海太郎・湊二郎「…」

正雄「それだけじゃない。『坊ちゃん』には、うらなり、赤シャツ、その弟、山嵐、野だいこ、といった人物が登場するが、坊ちゃんと山嵐は友情関係で、山嵐と赤シャツは敵対関係だが、それ以外は恋愛感情で、つながっている。マドンナは、ほんの付け合わせだな。『坊ちゃん』は男の愛憎物語だな」

海太郎・湊二郎「…」

三千男「…」

正雄「日本には昔から、男色を受け入れる
伝統文化があった。戦国武将は少年を
寵愛した。織田信長と森蘭丸は有名だ
な。あと武田信玄、上杉謙信、徳川家康…。
女と、いちやつくのは武士の風上^{かざかみ}にも置
けない。むしろ男同士の方が男らしいと、
おおつぴらに許されていた時代だ。あの
新撰組の中でも盛んだったらしい。命の
やりとりをする時、心の抛^より所は女では
なく男ということか」

三千男「…」

海太郎・隣二郎「…」

正雄「俺は、その気は全くないけど」

とニヤリと笑い、ウイスキーを飲む。

三千男「…」

とサイダーを飲む。

一同、沈黙。

三千男「今、思いついたんだけどさ、ロン
ドン留学中の漱石が、下宿屋の主人殺し
の濡れ衣を着せられ、その無実を晴らす
のがホームズというのは、どうだろう」

一同「…」

海太郎「それは、おもしろい設定だ。近松
の虚実皮膜論だな。ぜひ書け。ただ、そ
の設定に頼らず、おもしろいトリックが
必要だな。あと2人のキャラクターと葛
藤」

三千男「うん」

海太郎「お前は、そっちの方向の探偵小説
を書け、正雄とは、違った方向な」

笑う、一同。

正雄は苦笑。

近くのベンチ。

そのうしろに、大きく達筆な文字が彫つてある。

「土方歳三が生きている」

○函館港

壁に達筆な落書き。

「土方歳三が生きている」

○函館のさまざまな場所

大通り、公園、病院、図書館、競馬場、港、駅…。

達筆な落書き。

「土方歳三は生きている」

それを興味深そうに見て、連れと語

る人々。

巡査が見て、顔を、しかめる。

○北海道庁立函館中学・校門（朝）

登校する生徒たち。

正雄と三千男も来る。

校門の壁を囲んで生徒たちが騒いでいる。

正雄・三千男「？」

○同・壁・前（前）

「どいてくれ」と顔を出す正雄。三千男も。

壁に大きく達筆の落書き。

「土方歳三は生きている」

正雄、それを見つめ、

正雄「……ここにもか」

○同・教室・中（朝）

机に函館新聞を広げる海太郎。

大きな記事の見出し。

「土方歳三氏、生存の噂、市中に広まる」
「目撃者、多数」
「白髪瘦躯の眼光鋭い老人か」

紙面を見る正雄、湍二郎、三千男。

海太郎「社にも情報が多数、寄せられているようだ」

正雄「……土方、生きてたら、逮捕されるのか、警察に」

三千男「死刑になるの？」

海太郎「それは、あるまいと、親父は言っていたな。土方を見つけた者に懸賞を出す

ことも考えているようだ」

正雄「へえ」

× ×

海太郎、机に数日後の函館新聞を開く。
記事の見出し。

「当函館新聞社から懸賞金貳萬円！贈呈」

（現在の貨幣価値で5500万円）

驚いて口笛を吹く正雄。

「警察発表、逮捕なし」

「事情聴取はあるか」

「土方氏みずから出頭なら賞金は本人に」

当時の土方歳三の、あの有名なイケ

メンの写真。

81歳の老人になった現在の土方の想像写真。太った顔と痩せた顔。白髪と禿げ頭。

背丈、五尺五寸（167センチ）。

土方の略歴、戦死したとされる状況が書かれている記事。

「箱館五稜郭で交戦中、流れ弾に当たって戦死したとされる」

「重傷を負った。盲目。片足喪失。記憶喪失。容貌が一変。白髪などの不確かな情報が寄せられている」

正雄たち「…」

○私立函館図書館・正面

○同・書庫

テーブルの上に土方歳三に関する本を山のように積み上げて真剣な表情で読んでいる正雄たち。

○阿部家・正面（夜）

小さな平屋。

○同・正雄の部屋・前（夜）

母（32）が、お盆を持って、来て、母「まあちゃん、お勉強？ 精が出るね。

おにぎり、ここに置いとくから」

正雄の声「ああ」

○同・正雄の部屋（夜）

机の上に土方に関する本。

正雄、おにぎりを食いつつ、土方の本を読み、真剣にメモをとる。

○中学校・教室・中

海太郎、正雄、湊二郎、三千男。

海太郎「土方の最期は、こうだ。土方は一本木関門を守備し、七重浜より攻め来る新政府軍に応戦。鬼のように戦い、馬上で指揮を執った。その乱戦の中、銃弾に腹部を貫かれて落馬、側近が急いで駆け付けた時には、もう絶命していたという。敵の銃弾ないしは、流れ弾に当たったとするのが通説だが、降伏に頑強に反対する土方を除くために味方の手によって暗

殺されたとする説もある」

正雄たち「…」

海太郎「さて肝心の土方の遺体だか、ほかの戦死者とともに五稜郭に埋葬されたとも、別の場所に安置されたとも言われるが、その場所は特定されていない。遺体は確認されていない。行方不明ということだ」

正雄「それが生存説に、つながるわけだ」

海太郎「とにかく、街に出て噂話を拾い集めよう。ガセネタも多いだろう。なにしろ賞金貳萬だからな、なかなか人に教えてくれんだろうがな」

正雄たち「…」

○函館のさまざまな場所

港、公園、商店街、住宅地、駅、路面電車の中、学校、銭湯…。

正雄たち、単独で人々に聞き込み調査をする。

大抵の人は、「知らない」と首を振る。

○夏空

○教室・中

海太郎、正雄、湊二郎、三千男、報告書を見ている。

報告書には、30件の、不審人物と状況などの情報が箇条書されている。

海太郎「結構、集まったな。みずから、言いふらしている者も、かなりいるらし

い。社にも、毎日、たくさん、やって来るようだ、ニセモノがな。よし、とにかく、シラミつぶしに1人1人、当たっていこう。無駄骨を惜しむな。根競べだ。50年近く逃げ延びたんだ。めったなことでは口を割らんだろう。少しでも怪しかったら、食らいつき、徹底的にマークする。式萬は、そう、やすやすとは手に入らんぞ」

正雄「…」

○函館公園・片隅

ほとんど人の来ない場所。

やって来る海太郎、正雄、湊二郎、三千男。正雄は一升瓶の酒を下げている。

松葉杖を突いた80代の老人の浮浪者

が立小便をしている。左足右腕が、ない。

老人を見つめる正雄。

浮浪者、突然、振り向いて正雄たちに黄金水をかけようとする。

「あつ！」と驚きの声をあげ、飛び退く正雄たち。

浮浪者「せっかく人が気持ち良く、用を足しているのに邪魔すんな！」

と、片方の松葉杖を振り上げ、怖い顔で、にらみつける。

正雄「いやあ、すまん、すまん」

と頭を下げる。

正雄「お詫びといっちゃあ、なんだが、これ……」

と一升瓶を差し出す。

浮浪者、警戒と疑いの目で正雄たちを見つめるが、無造作に受け取る。

正雄「少し話して、いいか？」

浮浪者「なんでえ？」

正雄「近頃、このあたりで土方歳三を見かけなかったか？ 噂話を聞いたとかでも」

浮浪者「ああ、土方歳三ね、今、チマタで噂の」

正雄「そうだ」

浮浪者「俺だよ、土方歳三は」

正雄たち「！」

浮浪者「フッフ……」

と笑う。

正雄たち「……」

○夏空

○ベンチ

腰かけた浮浪者、茶わん酒をグイと飲む。

浮浪者「ほお、いい酒だな」

見ている、正雄たち。

正雄「いやあ、まさかこんなに早く、あの噂の土方さんに対面できるなんて、驚いたよ」

しかし正雄、驚いた様子はなく、平静。

正雄「奇跡だよな。神様に感謝しなくちゃ」

浮浪者「（薄笑い）神様ねえ」

正雄たち「…」

浮浪者「まあ、会える時なんて、そんなもんさ。お前たち、ホントに運がいい」

海太郎・隣二郎・三千男「…」

正雄「体は、どう？」

浮浪者「（薄笑い）ご覧の通りさ」

正雄「…よかったら、その時のことから話してくれないか？」

浮浪者「五稜郭の戦^{いくさ}で、こんな、なつちまつたのさ。よく助かったもんだぜ。まあ、半年間、死ぬより苦しかったけどな。それから、ずっと物乞いの暮らしだ」

正雄たち「…」

浮浪者「昔のことは、すっかり忘れちゃったよ、都合のいいことに」

とニヤリ。

正雄たち「…」

浮浪者、正雄たちをチラッと見て、マジメな顔になり、

浮浪者「天保6年5月5日、武蔵の国、多摩郡、石田村に土方隼人と恵津の間に生

まれる。10人兄弟の末っ子。土方家は『お

大尽』と呼ばれる地元の豪農だったが、

父は俺が生まれる3か月前の2月5日に

労咳ろうがいで死に、母も俺が6歳の時に…。次

兄夫婦に育てられ、暴れん坊で『バラガキ』

と呼ばれ…。先を急ごう。それで明治2

年5月11日、箱館五稜郭にて壮絶な戦死

を遂げたはずが、死に損ぞんねて、こうして

生き恥をさらし、今年、81歳」

正雄たち「…」

浮浪者「こんなんで、どうだ？」

正雄たち「…」

浮浪者「こんなの、おもしれえか？ 話し

ても、つまらん」

正雄たち「…」

浮浪者、酒をゴクリと飲む。

正雄「…市村鉄之助は覚えているか？」

浮浪者「…」

正雄たち「…」

浮浪者「…鉄」

正雄「そうだ、鉄と呼んで、アンタが可愛

がつていた16歳の市村鉄之助だ」

× ×

浮浪者、歳三を演じ、

歳三「アイツは負けん気が強く、賢かったな」

正雄「その鉄之助に、アンタは五稜郭から

脱出を命じた」

× ×

以下、浮浪者は、歳三と鉄之助を演

じ分ける。

× ×

歳三「日野の佐藤家、姉の嫁ぎ先だ。そこ

に俺の形見を届けて、俺が、ここまで、
どう戦つてきたかを伝えてくれと。する
と鉄は」

鉄「私は、この地で討ち死にする覚悟でや
つてきました。誰かほかの者に、お命じ
ください」

歳三「命令に従わざれば、今、この場で、
お前を討ち果たす」

「俺は、徹底抗戦を主張し、五稜郭の地で果
てる覚悟に少しの揺るぎもなかった。し
かし、16の鉄を、むぎむぎと死なせるのは、
忍びなかったのだ。俺は、不承不承、承
知した鉄に50両、路銀に換えるための刀
二振り、手紙、写真、遺髪を託した」

○夏空

○公園・道

テクテク歩く正雄たち。

みんな、考え込んだ顔。

海太郎「どうするよ」

湊二郎「いくらなんでも、出来過ぎているな」

正雄「たいした曲者、くせもの役者だな。相当、訓

練を受けている」

三千男「ニセモノつてこと？」

正雄「うしろで糸を引くヤツがいるか」

一同「…」

海太郎「正雄が『みずから出頭すれば懸賞

金貳萬が、もらえる』と言ったら、笑つ

てたな」

正雄「面倒なことに首を突っ込んだようだ

な、オレたち」

一同「…」

海太郎「…次を当たってみるか」

○夏空

○函館・繁華街

○芝居小屋・前

にぎわっている。

やって来て看板を見上げる正雄たち。

30代と10代のサムライが、熱い視線で、じつと見つめ合う、色彩、鮮やかな絵。2人とも美形で女性的な顔立ち。

題名は「おんな芝居 師弟の絆は永

遠に 歳三と鉄」

正雄「…」

○場内

満席。女性客も多い。

今、舞台上で上演中。

土方歳三と市村鉄之助が、じつと見つめ合っている。2人とも女性が扮しているのが、わかる。2人とも濃い舞台化粧で、土方役の女性は老婆。

歳三「鉄」

鉄「はい」

歳三「ここに50両、路銀に換えるための刀二振り、手紙、写真、遺髪がある。これを日野の佐藤家、姉の嫁ぎ先に届けてほしい」

鉄「先生は、どうさるのですか？」

歳三「俺は、ここ五稜郭で討ち死にする」

鉄「私も、先生と死にまする！」

歳三「ならぬ！ お前は、俺の遺品を日野に届け、そして俺が、ここまで、どう戦ってきたかを伝えてくれ」

鉄「いやです！ 誰かほかの者に、お命じください」

歳三「お前は、まだ16、若い。むぎむぎ死なせるわけにはいかん」

鉄「ここで先生と死ねず、生き残り、そのあと何十年も生き長らえたとしても私の人生は無意味です」

歳三「お前は、いろいろ俺のために尽くしてくれた。感謝する。武士として死ぬのも意味があるが、人として生き続け、伝

えていくことも意味がある」

鉄「いやです！ 先生と生き、戦い、死んでいくことこそ、私の唯一の存在意義です！」

歳三「俺の命に従えぬというなら、今、ここで、お前を討ち果たす！」

と刀を抜き、鉄に向ける。

鉄「望むところです。市村鉄之助、土方歳三に討ち果されるのなら、これにまさる喜びはありません！」

と、その場に、座り込む。

鉄「さあ、お斬りください」

と両手を組んで、目を閉じる。

歳三「…」

歳三、刀を振り上げる。

鉄「…」

歳三「…」

鉄「…」

歳三「…出来ぬ」

と刀をおろす。

歳三「ただ、お前を死なせたくないのだ」

と涙を流す。

鉄も泣く。

歳三「そして生きて、この日本の将来を見

届けてほしいのだ、この俺が見ることの

出来ない新しい日本の姿をな。そして鉄、

ついでに俺のことも少しは思い出してく

れ、馬鹿な師匠をな」

2人とも激しく泣く。

観劇している正雄たち。

ほかの観客たちは泣いている。

女性客の多くは号泣。

鉄「…わかりました。先生、私は行きます！

必ず、そのお品を、日野にお届けいたし

ます。いろいろ、わがままを言つて、先

生を困らせ、申し訳ありませんでした」

歳三「そうか、届けてくれるか。頼むぞ」

鉄「命に換えましても」

歳三「命は、ひとつしかない。大事にしろ」

鉄「はい！」

ほほえみ合う、2人。

鉄「先生、お願いがあります」

歳三「なんだ」

鉄「最初で最後のお願いです。私を力いっ

ぱい抱きしめてください。父のように、兄

のように、そして…」

2人、しっかりと見つめ合い、しっかりと抱き合う。

○同・楽屋

歳三に扮していた80代の老女、舞台化粧のまま、座り、キセルでタバコを吸っている。

その前に正雄、海太郎、湊二郎、三千男。

老女「(落ち着いた口調) たしかに、アタシが土方歳三だ」

驚き、呆然とする正雄たち。

老女「そう、土方歳三は女だったんだよ」

とニヤリ。

正雄たち「…」

老女「今は、こんなシワクチャ・バアサンになっちまったが、50年前は、それはそ

れは苦み走った男前だったんだ。男からも女からも、ずいぶん迫られたもんだ」

正雄「女つて、よくバレなかったね」

老女「そうさね、声から立ち居振る舞いを男っぽくして、胸をサラシで強く巻いて、仲間と風呂や水浴びは避けたけどね。もちろん剣の腕前もあげてね。ああ、たくさん人を斬ったな。今でも夢に見るよ」

正雄たち「…」

正雄「鉄之助とは」

老女「(ニヤツと笑い) ずいぶん可愛がつてやったよ。でもアタシとしちゃあ、総司が好みだったんだけど、フラれてね」

正雄「沖田総司…」

呆然としている正雄たち。

○繁華街

ぐったりした顔で歩く正雄たち。

正雄、舌打ちして、

正雄「早々、『土方歳三は女だった』と来たか」

と、ため息。

三千男「ホームズは女、という研究がある

って言ってたね」

海太郎「日本では、上杉謙信女性説が一番、

有名だな」

三千男「そんな話があるんだ」

海太郎「いろいろあるぞ、日本にも。織田

信長とか」

三千男「ホント？」

海太郎「徳川家重、家定。天草四郎」

三千男「なんで、そんな話が、出てくるのかな？」

海太郎「その有名人物に理解できない言動

がある、『女なら、ありうる』と考えた

んだろうな」

湊二郎「男と女は、違うからな」

正雄「根底には、『女は不可解で、男より優

れている』という尊敬というか恐れがあ

るのだろうか」

一同「…」

湊二郎「キリストは女だったという話もあるよ」

るよ」

皆、力なく笑う。

正雄「…ああ、疲れたなあ」

湊二郎「でも、あの人、楽しそうだったな」

苦笑する一同。

○夏空

○函館の街

○剣道場・横

窓から道場内での稽古を見ている正雄たち。

防具を着た弟子たち、打ち合う。声
と音。

道場の上座に正座して、鋭い視線を
弟子たちに送る白髪の80代の老人。

○天然理心流剣術道場・前

看板。

○道場内

老人と向かい合って正座する正雄たち。

正雄たち、足が、しびれてくる。

老人「ワシが土方歳三であると…」

正雄「たしかな証拠は、ないのですが…、
街の噂で」

老人「…噂か。噂とは口に尊いと書く。光
栄というべきか。フフフ…」

正雄たち「…」

老人「土方歳三は天然理心流剣術の達人で
あつたからな」

正雄たち「…」

老人「土方とは昔、天然理心流試衛館の同
期入門で、ともに稽古に励んだ仲間だ。
滅法強かったが、行商中に学んだ、さま

ざまな流派のクセが取れてなかったな」

正雄たち「…」

老人「と、言ったら、どうする？」

とニヤリと笑う。

正雄たち「…」

老人「お前たち、剣道は？」

海太郎「みんな、武術は、ひと通り」

老人「ワシと立ち会えば、お前たちの腕でも、

ワシが土方か、どうか、わかるかもしれん」

正雄たち「…」

× ×

中央に防具を着けず、竹刀を構える

老人。

それを四方から取り囲む、防具と竹

刀の正雄たち4人。

老人「いつでも、どこからでも、1人ずつ

でも4人同時でも、いい。容赦なく打ち

込んで参れ」

正雄たち「…」

スキのない老人の構え。

正雄たち、打ち込めない。

老人「…よし、来ないなら、こちらから参

るぞ」

正雄たち「！」

正雄たち「…エエーイ！」

正雄たち4人、同時に老人に打ち込む。

老人「オリヤー！」

一瞬のうちに老人は、正雄たち4人

の攻撃を跳ね返し、4人に面、胴、

小手、突きを食らわせる。

痛打され、うめき声をあげて、床に

転がる正雄たち。4人、激しい息づ

かい。

老人「…土方歳三である証拠など、いらぬ。

人は誰でも、自分が土方歳三であると思

えば、その瞬間から土方になれる」

正雄たち「…」

正雄「では、アナタは」

老人「土方歳三だ」

正雄たち「…」

正雄、息切れしつつも、ヨロヨロと

立ち上がり、案外、落ち着いた様子で、

正雄「よく、わかったよ。アンタが土方歳

三であるかどうかは、ともかく、アンタ

が天然理心流の正統な後継者であること

はね」

○函館の街

カフェで、ぼんやりしている正雄たち。

会話なし。

○夏空

○養老院・正面

看板。

○養老院・庭

ぼんやりした顔の80代老人。車椅

子。うしろに看護婦。

老人「ワシは土方歳三だ。ワシは土方歳三だ」

と、以下、ずっと、うわ言のように

繰り返す。認知症。

老人を見つめる正雄たち。

正雄「いつから？」

看護婦「半年前から。ボケが始まったのと同じ頃、老人が、よく訪ねてきて、土方歳三の話を、よく聞かせていた。そのうち、『ワシは土方歳三』と言いついて出して」

正雄たち「…」

正雄「どんな人？」

看護婦「60代の男の人。名前は、なんて言ったかな」

○旭岡町・道

歩く正雄たち。

三千男「訪ねてきた老人って…」

湊二郎「怪しいな」

正雄「…」

三千男「次は？」

海太郎、報告書を見て、

海太郎「アメリカ教会、日曜」

湊二郎「まさか『土方歳三は、金髪のアメリカ人でした』は、ないよな」

一同、苦笑。

○夏空（朝）

○アメリカ教会・正面（朝）

○同・中（朝）

礼拝。信者たちはアメリカ人。

牧師は80代の黒髪のアメリカ人で、英語で説経。

正雄たちも。

× ×

以下、牧師と海太郎の会話は英語。

海太郎の英語は流暢。

海太郎「初めまして、私は長谷川海太郎と

言います。彼らは私の友人です」

牧師「こんにちは」

正雄たち「こんにちは」

海太郎「突然ですが、失礼な質問を、お許

しください」

牧師「为什么呢？」

海太郎「あなたが、土方歳三という噂があ

ります」

牧師、ほほえんで、

牧師「そうですか」

正雄たち「…」

牧師「あなたは、ずいぶん英語が堪能ですね」

海太郎「ありがとう」

牧師「(ニッコリ) …私に答えさせる方法が、

ひとつあります」

海太郎「？」

牧師、聖書を手に取る。

牧師「『ストップ』と言ってください」

牧師、ページをパラパラとめくる。

海太郎「…」

正雄たち「…」

ページをめくる、牧師。

海太郎「ストップ」

牧師、あるページで止める。

そのページを海太郎に見せる。

牧師「今から一分で、こここのページに書い

てあることを憶^{おぼ}えて、一字も違^{ちが}えること

なく暗唱してください」

正雄たち「！」

海太郎「…」

ほほえむ、牧師。

海太郎「…わかった」

と、じつと聖書のページを凝視する。

ほほえみの牧師。

正雄たち「…」

× ×

海太郎、暗唱を始める。

正雄たち「（緊張）…」

海太郎の暗唱。よどみない流暢な英語。

牧師のほほえみ。

正雄たち「…」

× ×

海太郎、暗唱を終える。

正雄たち「…」

と牧師を緊張した顔で見る。

牧師、無表情。

正雄たち「…」

海太郎「…」

正雄たち「…」

牧師、顔を輝かせ、

牧師「パーフェクト！ ワンダフル！ フ

ァンタスティック！」

と叫ぶ。

大きなため息をつく正雄たち。笑顔。

海太郎は、わりと平静。

牧師「（真顔で日本語）…私は、土方歳三です。

いや、私も土方歳三です」

正雄「…」

海太郎たち「！」

牧師「（日本語）ご褒美に、我々のリーダー

を教えましょう」

○洋館・前

広大な洋館。

正雄たち、やって来て、洋館を見て、
表札を見る。

「義豊 鉄」。

正雄「(つぶやく) ヨシトヨ・テツ…」

海太郎「船会社の社長か…」

○同・応接間

虎の敷皮。壁には鹿の首。

豪華客船の模型。刀。壺。皿。茶器。

統一のない豪華な、しかしセンスの
悪い調度品。

和服の義豊 鉄(62)と見つめ合う、

ソファに座る正雄たち。

鉄「君たちは、土方歳三のことを、どれほ

ど知っているのだ」

正雄たち「…」

鉄「何も知りもしないで金目当てで、野良
犬のように嗅ぎ回っているのだろ」

正雄たち「…」

正雄「おつしやる通り、我々は賞金稼ぎです。
お尋ね者が、どんな罪を犯したか、いや、
どれほど日本のために貢献したか、男と
して魅力があったか、ということとは、ま
ったく関係ない。むしろ邪魔になるかも。
賞金稼ぎが、お尋ね者に共感しすぎると
最悪、見逃してやるなんてドジを踏むこ
ともある」

鉄「…」

正雄「あなたが、今回の騒動の中心人物、
黒幕ですね」

鉄「…」

正雄たち「…」

鉄、笑つて、

鉄「…そうだな」

正雄「では、さぞかし土方歳三には、今ま

でのニセモノ以上の思い入れが、おあり

だ」

鉄「そうだな」

正雄「…あなたも、いや、あなたは、あな

たこそ土方歳三ですか？」

鉄「…無作法な君たちに腹を立てることは、

ひとまず置いておこう」

正雄たち「…」

鉄「いかにも、私こそ、土方歳三だ！」

正雄たち「…」

正雄「では、僕たちが、今までの土方歳三

と名乗る人物に聞いてきた話を、あなたにも、ぜひ語ってもらいたい、土方歳三と市村鉄之助の永久とわの別れを」

鉄「望む所だ！」

正雄たち「…」

以下、鉄は、歳三と鉄之助に扮し、2人の別れを熱く、ドラマチックに語る。

歳三「鉄」

鉄「はい」

歳三「ここに50両、路銀に換えるための刀二振り、手紙、写真、遺髪がある。これを日野の佐藤家、姉の嫁ぎ先に届けてほしい」

鉄「先生は、どうさるのですか？」

歳三「俺は、ここ五稜郭で討ち死にする」

鉄「私も、先生と死にまする！」

歳三「ならぬ！ お前は、俺の遺品を日野に届け、そして俺が、ここまで、どう戦ってきたかを伝えてくれ」

鉄「いやです！ 誰か、ほかの者に、お命じく下さい」

歳三「お前はまだ16、若い。むぎむぎ死なせるわけにはいかん」

鉄「ここで先生と死ねず、生き残り、そのあと何十年も生き長らえたとしても私の人生は無意味です」

歳三「お前は、いろいろ俺のために尽くしてくれた。感謝する。武士として死ぬのも意味があるが、人間として生き続け、

伝えていくことも意味がある」

鉄「いやです！ 先生と生き、戦い、死んでいくことこそ、私の唯一の存在意義です！」

歳三「俺の命に従えぬというなら、今、ここでお前を討ち果たす！」

鉄「望むところです。市村鉄之助、土方歳三に討ち果されるのなら、これにまさる喜びはありません！」

歳三「…」

鉄「さあ、お斬りください！」

鉄、両腕を組み、目を閉じる。

歳三「…」

歳三、刀を振り上げる。

鉄「…」

歳三「…」

鉄「…」

歳三「…出来ぬ」

と刀をおろす。

歳三「俺を、これ以上、困らせないでくれ」

鉄「…」

歳三「ただ、お前を死なせたくないのだ」

と涙を流す。

鉄も泣く。

歳三「そして、生きて、この日本の将来を

見届けてほしいのだ、この俺が見ること

の出来ない新しい日本の姿をな。そして

鉄、ついでに俺のことも少しは思い出し

てくれ、馬鹿な師匠をな」

2人とも激しく泣く。

歳三「お前は、俺の息子だ。子供というのは、

親よりも長生きしなければならぬ。そし

て親のやり損ねたことをしてもいいし、

関係のないことをしてもいい。親と反対

のことをしてもいい。俺は、お前の行く

末を空の上で見ているぞ」

鉄「先生！」

歳三「辞世の句をお前に託そう」

『たとえ身は蝦夷えぞの島辺に朽ちるとも魂たまは東あづま

の君や守らん』

歳三「どうだ、出来は？」

鉄「私は、無学で、俳句・短歌の素養はあ

りませぬが、心に染み入る、いい句だと

思います。生涯、毎日、唱えます」

歳三「それは、うれしいな。いい部下を持

つたな、オレは」

鉄「…先生、私は行きます！ 必ず、その

お品を、日野にお届けいたします。いろ

いろ、わがままを言つて、先生を困らせ、
申し訳ありませんでした」

歳三「そうか、届けてくれるか。頼むぞ」

鉄「命に換えましても」

歳三「命は、ひとつしかない。大事にしろ」

鉄「はい！」

ほほえみ合う、2人。

鉄「先生、お願いがあります」

歳三「なんだ」

鉄「最初で最後のお願いです。私を力いっ

ぱい抱きしめてください。父のように、兄

のように、そして…」

歳三「お安い御用だ。ははは…」

2人、しっかりと見つめ合い、しつ

かりと抱き合う。

鉄「私は、土方先生にあこがれ、影響を

受けたいと思いました。先生の主義主張、思想は、もちろん、しぐさ、表情、声、すべてをマネしようと思いました。先生の好きなモノは、すべて好きになり、嫌いなモノは、すべて嫌いになりました。私は、土方先生に憧れるあまり、先生そのものになりたかった、先生と一体になりたかったのです。今やつと、市村鉄之助は土方歳三先生と一体になりました！」

鉄、語り終わる。

正雄たち「…」

鉄「…」

正雄「…こんなに熱く力強く語れるのは、この世に2人しかない」

鉄「…」

海太郎たち「…」

正雄「当事者本人たち。すなわち土方と鉄」

鉄「…」

海太郎たち「…」

正雄「あなたは、どう見ても60だから鉄。

というより歳三へ向けられた強すぎる敬

愛、あこがれが、あなたを歳三自身でな

いことを証明している」

鉄「…」

正雄「あなたが名乗っている名字の義豊は、

歳三の本名だ。敬愛する人の本名は、名

乗りたいよね、市村鉄之助ドノ」

見つめ合う、鉄と正雄。

鉄「…いかにも私は市村鉄之助だ。土方歳

三ではない、まことに残念ながらな」

正雄たち「…」

鉄「私は、昔も今も、土方先生を心から敬

愛している。その気持ちが高まり、いつ

しか土方歳三になりたいという願望にな

った」

正雄たち「…」

鉄「そして、それが今回の行動を起こさせた」

正雄たち「…」

鉄「想像するのも残念だが、おそらく先生

は五稜郭で壮烈な戦死を遂げられたの

であろう。しかし私の心の中では、生き

続けている。いや、死ぬわけではないのだ、

土方歳三ともあろうツワモノが。こうし

て、目をつぶると戦い続けている先生の

姿が目に見え」

正雄たち「…」

鉄「私だけの先生であつてほしいという強い気持ちがある。しかし、それではないけない。」

私以外のほかの人の心にも土方先生は生き続けてほしいという気持ちもある。仮に土方先生が、あの時、戦死されたとしても人々が50年も前に亡くなつた土方先生を思い、さらに我々始め多くの人が『私こそ土方歳三だ』と名乗り、なりすましてくれることを願つたのだ」

正雄たち「…」

鉄「ここ函館のみならず日本中の人々が『土方歳三が生きているのか!』と騒ぎだし、胸をときめかせ、信じたら、どれほど楽しいことか。そして日本人すべてが『私こそ土方歳三だ!』と名乗ったら、ど

れほど心躍ることか。今こそ、すべての日本人は土方歳三になるべきだ。それが、私が考える日本を、よくする唯一の方法だ」

○元町・高級住宅地・道

とぼとぼと歩く正雄たち。

みんな、押し黙っている。

海太郎「市村鉄之助が仕掛け人だつたとはな」

一同「…」

海太郎「これで、この騒動も、1件落着、収束だな」

一同「…」

三千男「賞金は?」

湊二郎「土方歳三が、いないんじゃ、もら

えないよ」

正雄「…」

海太郎「どうした、正雄」

正雄「…ちよつと、いいか？」

○函館中学・校門

やって来る正雄たち。

正雄は、手に長い包みを持っている。
中に入っていく。

○同・校庭

横切る正雄たち。

夏休み中なので、誰もいない。

○同・校舎内・廊下

歩く、正雄たち。

○同・使丁室・前

「使丁室」の札。

やって来て、戸を叩く正雄。

正雄「内藤さん、阿部です」

少しして、戸が開く。

内藤が立っている。不審そうな顔。

正雄「遅くなったけど、この前、ロシアの水兵たちから助けてもらったお礼に、うかがいました。あの時は、本当にありがとう。おかげで命拾いをしたよ。でも内藤さんが、あんなに強いというか、剣の達人だなんて、知らなかったよ。よく、その不自由な体で…」

内藤「…」

正雄「あ、失敬」

正雄、簡素な室内の奥の小さな台所

を、のぞいて、

正雄「あ、昼飯だった？」

まな板の上に生イカ。

内藤「ああ、遅いな」

正雄「お、イカか。うまそうだな。今が旬だよ。内藤さん、結構、おいしいの食べてるね」

内藤、迷惑そうな顔をするが、

内藤「たいしたもの、ないが、食っていくか？」

正雄「(笑顔) いただきます！」

× ×

小さな丸い膳の上に、冷やしうどん、イカの刺身、切り干し大根、タクアン。

正雄「いやあ、本当に、うまそうだ」

内藤「こんな体だから手間のかかるモンは

作れんが」

正雄「しかし、かぶっちゃったね、ミヤゲにタクアンなんかを持って来ちゃって」

湊二郎「だから、スイカって言っただろう」

内藤「いや、タクアンは好物だから」

正雄「じゃあ、遠慮なく、いただきます！」

正雄、「うまい！」を連発し、うまそうに、バクバク食べる。

正雄「子供の頃、好きだったものつてオトナになっても変わらないもの？」

内藤「そうだろうな」

正雄「内藤さんは、国は、どこ？」

内藤「：東京のハジツコ」

正雄「剣道、やってたんだ」

内藤「まあ、人並みにな」

正雄「あの腕前は、人並みじゃないですよ」

内藤「…（苦笑）尋問か、取り調べだな」

海太郎「ご馳走になつてゐるのに、すみません。

正雄、失礼だぞ」

正雄「どうも」

と内藤にペコリと頭を下げる。とは

言え、気にしていない顔。

気まずい雰囲気。

× ×

食べ終わり、

正雄たち「ごちそうさま」

正雄「（改まった口調で）内藤さん、昼飯の

お礼というわけじゃないけど、俺たちに

付き合つてくれないかな」

内藤「？」

海太郎たち「？」

正雄「会わせたい人がいる」

正雄たち「…」

内藤「…誰？」

正雄「あなたが、とても可愛がつていた人」

内藤「…」

○洋館・前

「義豊 鉄」の表札。

○同・応接間

じつと見つめ合い、座る、内藤と鉄。

内藤「…」

鉄「…」

内藤の隣に長谷川淑夫（45）。

うしろに正雄たち。

鉄「副鉄汽船の義豊 鉄です。いや、阿部

君に市村鉄之助と見破られました。今回

の『土方歳三騒動』の仕掛け人です」

長谷川「私は函館新聞社社長で主筆の長谷川です。土方歳三発見者に懸賞金貳萬円贈呈キャンペーンの主催者です。ちなみに、ここにいる海太郎と隣二郎の父です」

内藤「：内藤です。函館中学で使丁をさせてもらっています」

見つめ合う、内藤と鉄。

正雄たち「：」

正雄「鉄さん、土方さんと鉄さんとの師弟愛、絆、そして別れを聞かせてもらい、本当に感動しました。思い出すだけに胸が、いっぱいになり、今にも涙が、こぼれてきそうです」

内藤・鉄「：」

正雄「それで、日ごろ、世話になっている

長谷川のオヤジさんや内藤さんにも聞かせたくなってるね。ぜひ、もう一度、聞かせてくれないか？ オレも、ここにいるみんなも、もう一度、聞きたいんだ。なあ、そうだろう？」

と、みんなに同意を求める。

みんな、一瞬、戸惑うが、「聞きたい」

「オレも」と、それぞれが言う。

長谷川「キャンペーン主催者として私も、ぜひ拝聴したいですな」

鉄「：」

内藤「：」

長谷川「：」

正雄たち「：」

鉄「わかった。」

以下、鉄は、前回同様、歳三と鉄に扮し、2人の別れを熱く、ドラマチックに語る。

歳三「鉄」

鉄「はい」

歳三「何をしている？」

鉄「はい。月を見ております」

歳三「月見か。風流なことをするな。オレには、そんな風流な趣味はないが、ふふふ、オレは、田舎者だからな」

鉄「月を見ると、心が落ち着きます。死ぬのも怖くなくなります」

歳三「じゅあ、オレも、一緒に月を見るか」

鉄「先生ほどのお方でも、死ぬのは、怖いのですか？」

歳三「（即座に）怖い！ 死は、恐れから入って、安らぎに抜けると言うがな…」

鉄「私は、先生のために、死ぬ覚悟は、とうにできております。どんなことでも、いたします」

歳三「そうか、オレのために何でもするのだな」

鉄「はい」

歳三「では、それにつけ込むとするか」
鉄「…」

× ×

聞いている内藤たち。

内藤「…」

長谷川「…」

正雄たち「…」

× ×

鉄「なんでも、おつしやつてください」

歳三「俺は、ここ五稜郭で討ち死にする」

鉄「私も、先生と死にまする！」

歳三「ならぬ！」

鉄「いやです！」

歳三「鉄、お前には頼みたいことがある」

鉄「…」

歳三「ここに50両、路銀に換えるための刀

二振り、手紙、オレの写真、遺髪がある。

これを日野の佐藤家、姉の嫁ぎ先に届け

てほしい。そして俺が、ここまで、どう

戦つてきたかを伝えてくれ」

鉄「…いやです！ 私は、ここで先生と戦い、

死にます。先生と一緒に死にます！」

歳三「ならぬ！」

鉄「誰か、ほかの者に、お命じください！」

歳三「お前はまだ16だ。若い。むざむざ死なせるわけにはいかん」

× ×

正雄「あ、すいません！ ちょっと中断し

てください！」

海太郎「（驚いて）どうした、正雄。これか

ら、いいところが始まるのに、水を差すな。

鉄さんにも、内藤さんにも失礼だぞ」

正雄「どうですか、内藤さん。これまでの

ところ」

内藤「…」

鉄「…」

海太郎たち「…」

正雄「ちゃんと語られていますか？」

内藤「…」

鉄「…」

長谷川「…」

海太郎たち「？」

内藤「…抜け落ちているところがある」

一同「！」

内藤「抜けているモノがある。一番、大事

なモノ」

内藤、飾つてある刀を見る。

正雄、それを見て、刀を取りに行く。

一同「？」

鉄「…」

正雄、内藤に刀を手渡す。

内藤、受け取り、刀を見つめる。

鉄「…」

内藤「（芝居がかかる）…鉄、ここに50両、路

銀に換えるための刀二振り、手紙、写真、

遺髪がある。これを日野の佐藤家、姉の嫁ぎ先に届けてほしい」

鉄「！」

海太郎たち「！」

長谷川「！」

正雄だけが、平静な表情。

内藤「それから、これを（持った刀を見つ

め）必ず手渡してくれ。オレ自身だからな。

和泉守兼定。名刀だ」

鉄「…」

海太郎たち「！」

長谷川「！」

正雄「…」

内藤「…オレは、刀剣に関しては並々なら

ぬ執着を持っていた。近藤さん、総司、

井上らは武士の身分として帯刀を許され

だが、オレは豪農とはいえ百姓の出だ。浪士組に参加するまで帯刀が、はばかれていた。だから剣に対する憧れが強いんだ」

一同「…」

内藤「…これを手に入れた時は本当に天にも昇る気持ちだったぞ。これは、オレの宝物というより、オレ自身、いやオレの理想だ。だから戦死して、敵の戦利品にしたくない。他人に渡したくない。討ち死にするのは望むところだが、愛刀には折れてほしくない。だから、美しい今のままで姉に届けてほしいのだ」

鉄「…」

内藤「必ず届けてくれ」

鉄「…」

一同「…」

そして鉄を見る。

鉄の顔、歪む。

正雄「それで鉄さん。あなたは、なんて答えたんですか？」

鉄の顔が、さらに歪む。

正雄「（語気強く）まもなく戦死する恩師・土方歳三に刀を届けてくれと命じられて、あなた市村鉄之助は、なんと答えたのだ！

さあ、言ってみろ！」

鉄「…」

内藤「…」

一同「…」

鉄「…」

一同「…」

鉄「（苦しそう）…はい、命に換えましても

必ず、お届けします!」

内藤「…」

一同「…」

正雄「…その刀が、ここにある」

鉄「…」

内藤「…」

正雄「義理のお兄さん佐藤彦五郎さんが、

市村鉄之助から受け取ったのは、手紙、

写真、遺髪。50両は使い果たし、刀二振

りも路銀に消えた。あの混乱の時世、まあ、

何かと物入りだったからな。それは、いい。

しかし、佐藤さんは、名刀和泉守兼定は、

受け取っていない」

鉄「…」

内藤「…」

長谷川「…」

海太郎たち「…」

正雄「その刀が、これだ。ここにある」

鉄「…」

内藤「…」

正雄「土方歳三から届けてくれと命じられ

た名刀は、その愛弟子・市村鉄之助・あ

なたが姉に届けず、50年近く持っていた

…」

鉄「…」

内藤「…」

海太郎たち「…」

正雄「(鉄を見つめる) …」

鉄「…そうだ、私は土方先生の愛刀、和泉

守兼定に魅せられたのだ。どうしても、

ほしかった。佐藤さんには渡さなかった」

一同「…」

鉄「日野に向かう途中、考えた。おそらく

土方先生は戦死するだろう。そうしたら、先生は、この世から、すべて、なくなり、消えてしまう。それでも先生はオレの心の中に永遠に生き続ける。それで十分だと、初めは考えていたが、それでは淋しい、むなしい、心の抛り所がない。私は、何としても土方先生をカタチとして、自分のそばに、置いておきたかった」

一同「…」

鉄「…いや、土方先生のそばにいたかったなどというキレイごとは、もうやめよう。毎日のように和泉守兼定を見ているうちに、その美しさに心を奪われていった。誰のモノにもしたくなかった。オレのモノにしたくなった。一生、これを、そば

に置いておきたかった」

一同「…」

鉄「土方先生の命に背いた、許されざる背信であるは百も承知。しかし、それでも私は和泉守兼定が、ほしかったのだ」

一同「…」

鉄「…私は単なる盗人ぬすつとに成り下がったのだ」

一同「…」

鉄「…」

内藤「…もう、いい」

鉄「！」

正雄たち「！」

内藤「これは、オレが鉄に与えたのだ」

鉄「！」

正雄たち「！」

内藤「鉄は、この和泉守兼定を持つに値す

るほど、オレに尽くしてくれた。持つに、
ふさわしい人間に成長した、鉄はな」

鉄「…」

鉄、涙が出て来る。

内藤「あの時、鉄に与えるべきだったのだ」

一同「…」

内藤「さあ、鉄よ、今こそ、この和泉守兼
定を受け取ってくれ。47年、遅れたがな」

鉄「…」

一同「…」

内藤、鉄に刀を差し出す。

見つめ合う、内藤と鉄。

鉄、頭を下げて、うやうやしく受け
取る。

内藤、ほほえんで、

内藤「ははは、これでオレも肩の荷が下り

たぞ」

鉄「（泣く）…先生、すいませんでした、す
いませんでした」

と何度も頭を下げる。

内藤、うれしそうに、

内藤「鉄、会いたかったぞ。よく生きてい
たな」

鉄「…いえ、先生こそ。よくぞ、ご無事で…」
と泣く。

正雄たち「…」

内藤「（苦笑）しかし阿部よ、よくオレが土
方だつてわかったな」

正雄「（苦笑）今回の騒動、とにかく初め
っから怪しいヤツらが多すぎて冷静な推
理なんか、できっこないよ。こうなつた
ら、ヤケクソで、開き直るしかない。当

てずっぽう。出たところ勝負だ。まあ、し

いて言えば、オレたちをロシア水兵から助けてくれた、アンタの何でもありの実戦向きな天然理念流を見たこと。アンタのタクアン、ウドン、イカ、切り干し大根といった好物。そして内藤隼人という名前。これは土方が鳥羽・伏見の戦いに敗れたあと、一時期、名乗っていた名前だよね。隼人は父親の名前。身を隠している、本人だというヒントは出したいんだよね、見つけてほしいのか、淋しいのか。まあ、そんな、トコかな。でもシヤロック・ホームズからみたら、とても推理とはいえない、コジツケだね」

内藤「当てずっぽうに勝る推理なしか」

内藤、苦笑する。

○函館港

ブラブラ歩く、正雄たち。長谷川も。

長谷川「正雄、大手柄だな」

正雄、うれしそうでない顔。

正雄「…偶然だよ」

一同「…」

三千男「賞金、もらえるの？」

長谷川「もちろん、土方歳三を突き止めたんだからな」

一同「…」

三千男、無邪気に、うれしそうに、

三千男「どう、分けよう」

湊二郎「4等分？」

海太郎「正雄が、孤軍奮闘したから、独り

占め、ごっそり、持って行ってもオレた

ちは文句、言えないな」

正雄「オレに好き勝手なことをさせてくれたからだよ。みんなで分けよう」

海太郎「お前が、そんな殊勝な心がけの持ち主とはな」

と笑う。

正雄「賞金は、オレたちの成長、未来、可能性、つまり青春のために投資したい」

湊二郎「なんだか、カッコいいな」

正雄「海外留学費用に使うのは、どうだ？」

海太郎「ホントに、カッコいいぞ」

正雄「長く留学しているヤツに多くやるとか」

海太郎「ほお、不平等、不公平、好き勝手に、おもしろいな」

湊二郎「じゃあ、ボクが一番、多くもらうよ」

正雄「へえ」

湊二郎「パリに10年」

正雄「はは、それはスゴイな」

海太郎「がんばれよ、弟よ」

三千男「オレは、留学は考えてないなあ」

正雄「少年よ、大志を抱け、海外に飛び出せ！」

海太郎「まずは道具としての英語を身につける。金髪女と仲良くなって国際親善から始めよう！ 語学は女から教わるのが一番、身に付く」

みんな、笑う。

正雄「オレ、小説のアイデアが浮かんた」

海太郎「どんな？」

正雄「内藤さんをモデルにする」

海太郎「生きていた土方歳三か？」

長谷川「ウチで載せてやってもいいぞ」

正雄「いや、とてつもなく強い剣士だ」

三千男「机龍之介よりも強い？」

正雄「性格破綻者。それで片目片腕」

一同「…」

湊二郎「顔を、しかめ」ゲテモノ、悪趣味

だよ」

海太郎「まあ、敵役だね」
かたきやく

三千男「ボクは、おもしろいと思うけど」

海太郎「強烈なキャラクターには、違いな

いが…。片目片腕はソイツにとつてハン

デになっていない、個性の一種だ。神が

与えたシルシなんだ」

一同「…」

海太郎「それにふさわしい名前を、まず考

えることだな」

一同、思案。

湊二郎「それにしても机龍之介って、いい

名前だよな。古くならない名前。誰でも

使っているし」

三千男「どんな名前が、いいかな？」

湊二郎「阿修羅 地獄之介とか」

正雄「千面鬼 鬼十郎」

三千男「逆に、明るく華やかに、花嵐 江

戸之介」

海太郎「(さり気なく、ボソツと)：丹下左膳」

一同、ハツとして、

一同「…それいいね。スーツと入って来る」

正雄「海ちゃん、それで書いてよ。あげるよ」

海太郎「そんなの書きたくないよ」

笑う、一同。

美しい函館港。

○登場人物（少年と壮年）の写真と紹介文

阿部正雄。（1902～1957）

27歳から3年間、パリに留学、演劇を学ぶ。帰国後、探偵・歴史・伝奇・ユーモア小説などを発表。

筆名・久生十蘭。
ひさお じゅうらん

「黄金遁走曲」「金狼」「魔都」「キラコさん」「顎十郎捕物帳」「平賀源内捕物帳」

戦後、「鈴木主水」で直木賞受賞。

「母子像」が国際短編小説コンクール

第1席入選。

博識な技巧家で、心理分析に巧みな異能作家と知られる。

長谷川海太郎。（1900～1935）

18歳で渡米、各地を放浪。6年後、帰国。3つのペンネームを使い分け、谷譲たにじょう次で、米国体験記「めりけんじやつぶ」物、林不忘はやしふぼうで、時代小説「丹下左膳」シリーズ、牧逸馬まきいつまで、犯罪実録小説「世界怪奇実話」などを発表、人気作家になる。

長谷川湊二郎。（1904～1988）

27歳、パリ10年留学計画も1年で帰国。生前は、画家として、ほとんど知られず、死後、精緻な猫の絵で注目される。

納谷三千男。(1904～2001)

編集者、翻訳家、推理作家。

筆名・水谷^{みずたに}準^{じゅん}。

留学経験なし。

横溝正史との友情は知られる。

(終わり)

本電子書籍は、2015 年 12 月 4 日発行の『第 21 回函館港イルミネーション映画祭 2015 第 19 回シナリオ大賞・受賞作シナリオ集』より、審査員奨励賞受賞作品を抜粋したものです。

シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第 21 回函館港イルミネーション映画祭 2015
第 19 回シナリオ大賞 審査員奨励賞受賞作品

函館黄金遁走曲

作：上原 正志

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2016 年 2 月 1 日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒 040-0055 函館市末広町 4 番 19 号（函館市地域交流まちづくりセンター内）

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：株式会社新函館ライブラリ

〒 040-0051 函館市弁天町 4 番 8 号

電話 0138-84-1620 <http://www.nhakodate.com/>
